

生涯学習社会における学校の役割と 学校建築の持続的再生に関する国際比較研究Ⅱ

——オーストラリア NSW 州の学校教育と調査対象校の概要について——

山 田 真 紀*

International Comparative Study on the Role of Schools in Lifelong Learning
and an Examination of the Sustainable Renovation of School Facilities II
—Outline of School Education in NSW (Australia) and Report on Three Public Primary Schools—

Maki YAMADA

1. はじめに

本論文は、2003年度に村上心（椋山女学園大学生生活科学部助教授）を研究代表者として結成された、「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究会」が実施した調査研究のうち、オーストラリア調査で得た成果の一部を報告するものである¹⁾。本論文では、①研究会の研究枠組、②オーストラリア連邦国シドニー市の事例を理解するうえで必要となる、ニューサウスウェールズ州（New South Wales：以下、NSW と表記）の教育制度の概要、③調査を実施した3つの公立小学校の概要、の3点について報告を行う。

2. 本研究会の研究枠組

学校は子どもの成長と発達のためにどのような学習活動を提供すべきなのか。学校は生涯学習社会において、「地域の教育センター」として、いかなるサービスを社会に提供すべきなのか。将来の学校像を描き出すことができたとしても、現在の学校はその役割を果たすことのできる空間要素を持っているのか。もし、空間要素が適合しない場合、または社会構造の変化にともなって学校の役割と建築空間への要求が変化した場合、学校建築はどのように対応していけばよいのか。これらの問いは生涯学習社会に移行しつつある現在、全世界に共通する課題となっている。本研究会は、国際比較の手法を用いて、以下の3点を明らかにすることで、これらの課題の解決に必要な資料を提示し、社会構造の変化に対応しうる学校空間構成の方向性を提示することを課題とする。

* 人間関係学部 人間関係学科

(1) 当該社会における学校の役割範囲を特定する。

観点 1 : 学校は子どもの養育・教育という点において、他の教育施設および教育セクターとどのように役割分担しているか。学校はその役割分担を果たすために、どのような教育活動を展開しているのか。

観点 2 : 学校は地域において、生涯学習もしくは社会教育のための機能を持つか。持つ場合は、提供する活動内容と運営方法はどのようなものか。学校を地域の教育センターとして利用するメリットとデメリットはどのようなものか。

(2) 当該社会における学校建築の空間要素を把握する。

観点 1 : 学校建築が現在の構造をもつに至った歴史的・社会的背景とは何か。

観点 2 : 学校が生徒に提供する学習活動の内容と方法、さらに、学校が地域に提供する活動の内容と方法を鑑みた際に、現在の学校建築のもつ長所と短所は何か。

(3) 「当該社会における学校の役割範囲」と「学校建築の空間要素」との相互規定関係の枠組を明らかにし、日本及び調査対象国における持続可能な教育施設の建築計画手法の方向性を、ストックを活用した再生と、新築双方の視点で提示する。

本研究の学術的な特徴と意義は、以下の 3 点である。

(1) 建築学に対する新しい研究の視点を提示していること。

社会構造の中で学校建築を位置づけ、「当該社会における学校の役割範囲」と「学校建築の空間要素」との相互規定関係の枠組を明らかにし、持続可能な学校建築の方向性を提示する国際比較研究であること。

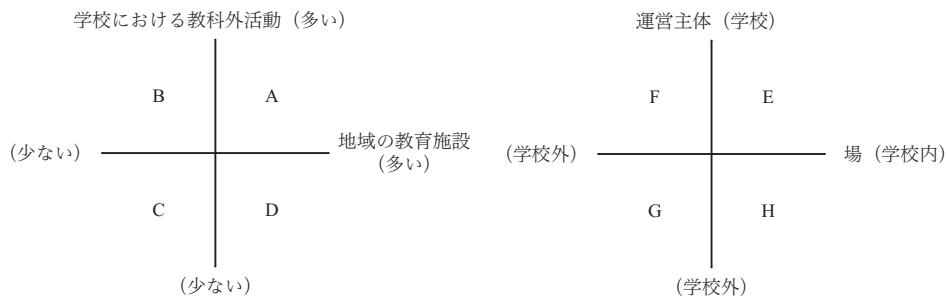
(2) 教育学（特別活動論）に対する新しい研究枠組を提示していること。

学校でどのような教育的活動を行うかには、社会によって多様性がみられる。教科と教科外活動との構造は、当該社会において学校が子どもの養育・教育のどの部分をどのように担おうとしているのか、さらに生涯学習社会を生きる人材をどのように育てようとしているかを示している。本研究では、従来の学校論やカリキュラム論で周辺的に扱われてきた教科外活動を、当該社会における学校の役割範囲を知る戦略的拠点として捉えている点に特徴がある。

(3) 建築学と教育学を繋ぐ学際的な研究であること。

40 人定員として設計された従来の学校建築が、少人数学級の実現のためのネックのひとつとなるなど、「学校でどのような活動をどのように実施するか」と「学校建築の空間要素」とは、密接な関連を持つ。生涯学習社会における新しい学校像を描くうえで、持続可能な教育施設の建築計画手法の方向性を示すことは不可欠である。

以上の研究枠組にもとづき、我々は、オーストラリアとフランスを調査対象国として選び、2003 年 4 月から 2004 年の 3 月にかけて実地調査を行った。調査対象国を選定するうえで重視したのは、「当該社会における学校の役割範囲」と「学校建築の空間要素」との相互規定関係を探るうえで、重要な変数を特定したり、統制したりすることができるように、選定した国の学校教育が、図表 1 に示した分類軸において異なった性質をもつことである。



図表1 各国の学校役割の諸類型

- (1) 学校と地域の教育施設の役割分担に着目すると、「学校における教科外活動が多いか少ないか」と「地域の教育施設が多いか少ないか」のふたつの軸をクロスさせてできる4象限に、各国を位置づけることができる。我々は、日本はBタイプ、オーストラリアはAタイプ、フランスはDタイプであるという仮説を立てている。
- (2) 教科外活動を実施する主体と場所に着目すると、「運営主体が学校か学校以外か」と「活動場が学校内か学校外か」のふたつの軸をクロスさせてできる4象限に、各国を位置づけることができる。我々は、日本は、Eに位置づく活動が多く、オーストラリアはEとFに位置づく活動が多く、フランスはGとHに位置づく活動が多いという仮説を立てている。

なお、我々は義務教育段階を研究の対象とするが、公立小学校は、私立学校や中等学校に比べて通学区の範囲が限定されており、学校と地域の教育施設がもつ役割分担の様態を描き出すうえで適度な地理的範囲を有すること、そのため地域のコミュニティセンターとしての機能を果たす可能性が高いことから、まずは公立小学校を対象として研究を進めることとした。なお、オーストラリアの小学校には3種類あり、2002年のデータによると、全体の在学生数のうち、公立小学校（Government）には72%、私立学校（Non-government Schools）のうち、カソリック系小学校には19%、独立小学校（Independent）には9%の子どもが通っている²⁾。独立小学校には、カソリック以外の宗教系小学校、モンテッソリやシュタイナーなどの教育思想に基づく私立小学校などが含まれる。

3. オーストラリア連邦 NSW 州の教育制度

オーストラリア連邦の教育行政機関は、2001年11月の改組により、教育・科学・訓練省 Commonwealth Department of Education, Science and Training となった。ここではオーストラリアの学校教育のアウトラインを決定するが、具体的な中身を決定して責任をもつのは、各州の教育行政組織である。オーストラリア連邦には6つの州と2つの連邦直轄区があり、それぞれにおいて教育制度に多少の違いが見られる。我々はシドニー市にある公立小学校を研究対象としているため、シドニー市を州都とする NSW 州の学校を理解するうえで必要な教育制度の概略を整理しておきたい。

(1) 教育行政機関

NSW 州の教育関係の行政機関で重要なのは、NSW 州教育・訓練省 NEW Department of Education and Training, と NSW 州学習委員会 Board of Studies NSW である。教育・訓練省は、日本の文部科学省にあたり、就学前教育、義務教育、義務教育以降の教育、職業教育機関 TAFE: Technical and Further Education, 生涯学習のための各種のプログラムを管轄し、教育と訓練サービスを提供している。学習委員会は、独立した法的権威組織で、次のような仕事を行っている³⁾。

1. カリキュラムの作成

キンダーガーテンから 12 年生までの学習指導要領を定め、これらの学習指導要領をサポートする教材を開発する。

2. 学業証書の発行

義務教育修了試験 SC と高校教育修了試験 HSC の管理と学生の評価

3. 学校の登録および認定

公立学校以外の小学校・中学・高校の登録を大臣に勧告するとともに、これらの中学・高校の生徒が義務教育修了試験 SC と高校教育修了試験 HSC を受験できるように許可する。

2003 年度時点において、NSW 州には、1649 校の公立小学校と 394 校の中等学校があり、444854 名の小学生と 305026 名のハイスクール生徒が学んでいる⁴⁾。これまで、40 ある学区 (School District) が、学区内にある学校を管轄し、学校の教育活動に役立つプロジェクトの提供、校長や教職員の意見交換の場の提供、学校対抗のスポーツ大会や音楽・芸術コンクールなどの運営など、各学校の教育活動をサポートする仕事を行ってきた。現在、教育・訓練省は学校行政組織の改革を進めており、学区を School Education Area という呼び方に変更し、さらにいくつかの School Education Area を束ねる大学区 Regions という枠組を作っている。大学区事務所 Region Office は教育訓練省から任命された大学区長 Regional Director によって運営されている。現在、NSW 州は 10 の Regions と 40 の School Education Area からなる。

(2) 学校制度

学校制度は、プレスクール (幼稚園)、小学校 primary education, ハイスクール secondary education, 高等教育機関 tertiary education からなる。7 月 31 日までに 4 歳になる子どもたちは、プレスクール (幼稚園) に通いはじめる。プレスクールはコミュニティサービス省の管轄で、免許をもつコミュニティや民間の組織が運営している。7 月 31 日までに 5 歳になる子どもたちは、小学校の最初の学年である準備学級 (キンダーガーテン: 以下、K と略称することもある) に入学する。法律的には 6 歳の誕生日がくるまでに小学校に入学していなければならないが、子どもの発達に合わせて、校長と相談のうえ、入学を早めたり遅めたりする配慮がなされている。子どもたちは、キンダーガーテンを終えると 1 年生になり、6 年生までの 7 年間で小学校を過ごす。小学校を終えると、学校区にある総合制ハイスクールに進学する。妥当な理由があれば学校区以外のハイスクールに入学の申請をすることもでき、また、男子校・女子校・専門家養成学校 Special Schools・

学力選抜によるセレクティブハイスクールなど、特色のあるハイスクールを選択することもできる。専門家養成学校とは、テクノロジーハイスクール、語学専門ハイスクール、舞台芸術ハイスクール、スポーツ専門ハイスクール、農業専門ハイスクールなど、特定の学習分野に重点を置いた学校である。また、セレクティブハイスクールは、学力の高い生徒を集めた進学校であり、小学校での英語と数学の成績と、英語、数学、一般能力を受験科目とするセレクティブハイスクールテストの結果に基づいて選抜される。ハイスクールの1年目は7年生と呼ばれ、多くの生徒は12年生までの6年間をハイスクールで過ごす。10年生になると、義務教育修了試験 School Certificate Examinations を受験し、一定の基準を満たしていれば学習委員会から義務教育修了証書 School Certificate が授与される。受験科目は英語の読み書き English-literacy、数学 Mathematics、科学 Science、オーストラリアの歴史・地理・公民 Australian History, Geography, Civics and Citizenship である⁵⁾。義務教育修了証書を得た生徒は、就職のために学校を去る場合もあるが、現在は7割以上の生徒が学校に残り、高等教育修了試験 Higher School Certificate Examinations を目指して勉強する。この試験は、高校教育修了の資格を得るためのものであり、また、大学などの高等教育機関に進学するための入学試験としての意味も持っている。生徒は、多くの選択肢のなかから科目を選択して受験する。高等教育機関に進学を希望する学生は、試験結果を UAI: University Admissions Index の点数で受け取ることができる。UAI とは、受験した英語科目のうち点数の良かった2科目と、それ以外の科目のうち点数の良かった8科目の点数をもとに算出される数値であり、0点から100点までの数値で表される。この点数をもって進学したい大学に入学できるかが決定される⁶⁾。大学では、3年間の学部教育を終えると学士号 BA を取得することができ、さらに1年間在学して論文を書き上げれば BA (Hons) という学位が与えられる。高等教育機関には、総合大学だけでなく、専門職の資格や職業技術を身につけるための高等専門課程 Vocational Education and Training (VET) もある。

(3) 学習指導要領 syllabus と州テスト state exam の実施

学校が提供する教育にスタンダードを設けるために、1991年にナショナルカリキュラムが導入された。NSW 州では、学習委員会がすべての教科に対して、学習指導要領を定めるだけでなく、学習指導要領をサポートする教材を開発している。学習指導要領には、理論・目標・成果・主題・評価についてのアドバイスが書かれている。小学校では6つの主要学習分野を勉強する。英語 English、数学 Mathematics、科学とテクノロジー Science and Technology、人文社会と環境 Human Society and its Environment、創造芸術 Creative Arts、心身の発育と保健体育 Personal Development, Health and Physical Education、の6科目である。外国語は「英語以外の語学教育」LOTE: languages other than English と呼ばれ、中国語・ギリシア語・インドネシア語・イタリア語・日本語・韓国語の6ヶ国語のシラバスが準備されている。各学校は、学校区の民族の構成を考慮して、どの言語を学ばせるかを決定する。いくつかの言語を指定して、選択制にすることもある。小学校段階では、外国語は必修ではないが、教科として外国語を設定するほか、「人文社会と環境」の授業の一環として、外国語に親しむ時間を設けるなど、半数以上の小学校が外国語教育に取り組んでいる。また、科目表には掲載していないが、「第二言語としての英語」ESL: English as a

図表2 NSW 州の実施する小学生対象のテスト

テストの名称	受験学年	内 容	実施時期
基礎能力テスト Basic Skills Test	3 年・5 年 (全員)	「言語判断能力」「数量判断能力」の2つから構成され、言語判断能力では、読み能力、言語使用能力、正しい句読点・綴りを識別する能力が試される。数量判断能力では、数、寸法、空間に関する能力が試される。所要時間は3年生が約100分、5年生が約120分。	8 月
小学生文章力テスト Primary Writing Assessment	3 年・5 年 (全員)	説明文と物語文を書く。文章の構成だけでなく、文法、綴り、正しい英語の書き方を採点する。	7 月
コンピューター能力査定テスト Computer Skills Assessment	6 年生 (全員)	コンピュータに関する生徒の知識と理解を総合的に査定する筆記テスト。生徒は氏名、性別、生年月日、アボリジニ・トーレス諸島人バックグラウンドをもつか、英語を母語とするかの情報提供を求められる。	5 月
オポチュニティクラス ⁸⁾ 選考テスト Opportunity Class Placement	4 年生 (希望者)	英語、算数、一般学力(思考能力)の3種類のテストから構成される。マーク式で各30分、30問を解く。	8 月
選抜制ハイスクールテスト Selective high schools Year 7 placement	6 年生 (希望者)	英語、算数、一般学力(思考能力)の3種類のテストから構成される。マーク式で各40分。	3 月

second language が公立学校の授業科目として設けられている。これらの教科は、オーストラリアは全人口の4分の1が海外出身であるという多文化社会であることを反映したものである⁷⁾。

NSW 州では、1 年間にさまざまな一斉テストを実施しており、小学生の全員が受験するのは、基礎能力テスト Basic Skills Test、小学生文章力テスト Primary Writing Assessment、コンピューター能力査定テスト Computer Skills Assessment、の3つである。名称、受験学年、内容、実施時期は図表2に示した通りである。テスト結果は学校に通知され、保護者にも郵送される。学校には、個々の生徒の成績だけでなく、アボリジニ(オーストラリアの先住民族)の子どもグループ、英語を第二言語とする移民の子どもグループなど、学校に在籍する子どものカテゴリーごとの達成度、州全体の平均に対する学校の達成レベルなどのデータも伝達される。生徒の達成を客観的に把握するだけでなく、特別なケアを必要とする生徒を特定したり、教師が生徒のレベルとニーズに合わせて教授方法や教授内容を見直す資料としたり、学校が学習指導要領の求める達成を果たしているかを査定したりする役割も果たしている。なお、試験結果の守秘に関しては、NSW 州の法律のもとで保護されており、特定個人の試験結果を公表したり、学校ごとの結果を公表して学校のランク付けをしたりすることは禁じられている。

(4) 学校暦・学校時間・時間割

NSW 州の学校は4学期制をとっている。新年度は夏休み終了後の2月がはじまる最初の週から始まる。図表3は2004年度の学校暦である。学期と学期の間には2週間程度の休みがある。

学校によって多少の違いはあるが、小学校は9時に始まって3時に終わる。オーストラ

図表3 2004年の学校暦 (NSW 州)

1 学期 (Term 1)	1 月27日から 4 月 8 日
2 学期 (Term 1)	4 月27日から 7 月 2 日
3 学期 (Term 1)	7 月19日から 9 月24日
4 学期 (Term 1)	10月11日から12月21日

リアでは午前中にモーニングティのための小休憩を取る習慣があり、ほとんどの小学校で11時になる前に20分の休憩を取る⁹⁾。そして1時前後から遅めの昼食を取る。

時間割の編成は、すべて担任教師の裁量に任されている。始業時間、モーニングティ、ランチ、終業時間は、学校ごとに統一されているが、時間の区切り方、どのように学習を配置するかは教師が自由に決めることができ、時間割は学期ごとに組み替えられる。重要なのは、学習指導要領において学習する科目が定められているものの、小学校では時間割を科目名で埋めることはないということである。日本の学校が総合的な学習の時間で、その実現を目指しているように、シドニーの学校では、テーマを設定して、各教科の関連する部分を横断的に学習する工夫が徹底されている。また、すべての科目において日本の教科書に相当する教科書はないため、教材は教師の手作りであるかワークブックを併用したものとなる。こうしたテーマ学習において、学習委員会が定めるすべての科目とその内容を網羅できるのかという点に関しては、別稿にて論じているのでこちらもあわせて参照いただきたい¹⁰⁾。

4. 調査対象校の概要

オーストラリア調査では、シドニー市にある公立小学校の平均的な状況を知るため、立地（都市と郊外）、学校規模（大規模と小規模）、通学区の発生（既存市街地とニュータウン）において異なる性格をもつ3つの公立小学校を選び、参与観察とインタビューを行った。本稿では、今後、データを分析するうえで重要な変数となる、学校規模、教職員スタッフの構成と人数、生徒数、生徒の社会的バックグラウンド、学校の歴史を整理しておきたい。

(1) 学校の特徴

アルティモ小学校は都心部にある学級数9クラスの小規模な小学校、カールトン小学校は郊外のニュータウンにある学級数27クラスの大規模な小学校、ミドバンクは郊外の既存市街地にある学級数7クラスの小規模な小学校である。図表4は、それぞれの小学校が属する学区と大学区、および学校の規模、学区の特徴、生徒の特徴、第二言語の授業、学校の歴史、生徒数の増減についてまとめたものである。

アルティモ小学校と、カールトン小学校は、マルチカルチャーなバックグラウンドをもつ生徒が多く通う学校である。アルティモ小学校は、22種類の言語を話す生徒がおり、生徒の74%が非英語圏を出身とし、特に、学区の一部にチャイナタウンを含むため、全校生徒の45%が中国系である。カールトン小学校は、45種類の言語を話す生徒がおり、生徒の90%が非英語圏出身である。特にベトナム、中国、韓国などのアジア系が多く、

図表4 調査対象校の特徴

	アルティモ小学校 Ultimo Public School	カールトン小学校 Carlton Public School	ミドーバンク小学校 Meadowbank Public School
調査日時	2004年8月	2003年9月	2003年9月
学区名 (School Education Area)	Port Jackson	St. George	Ryde
大学区名 (Region)	Sydney	Sydney	Northern Sydney
学校の規模	学級数9, 生徒数243名 P4スクール	学級数27, 生徒数789名 P1スクール	学級数7, 生徒数167名 P4スクール
学区の特徴	シティ（繁華街）の南西に位置し、学区の一部にチャイナタウンを含む。ピアモント湾沿は再開発により高級住宅地となっている。	シドニーの中心から南西に電車で15分程の郊外に位置し、移民が多く暮らす地域。	シドニーの中心から南西に電車で15分程の郊外に位置し、比較的古くからのオーストラリア人が暮らす地域。
生徒の特徴	マルチカルチャーな学校で22の言語を話す生徒がいる。生徒のうち74%は非英語圏バックグラウンド、45%は中国系（学区に中華街を含むため）。	マルチカルチャーな学校で45の言語を話す生徒があり、90%が非英語圏バックグラウンドをもち、アジア系が多い。ベトナム、中国、韓国、アラブ、マサドニア、マウリ（注：ニュージーランドの原住民）が多い。	25%が非英語圏バックグラウンド。24の国籍出身がいる。比較的古くからのオーストラリア人の子どもが多い。
第二言語の 授業開講状況	生徒全員が中国語の授業を受ける。Kは週に30分、1～6学年までは1時間の授業を受ける。中国語を母語とする生徒はさらに1時間、特別教室において高度な中国語を学ぶ。	中国語、アラビア語、インドネシア語、マウリ語、マサドニア語からバックグラウンドにあわせて授業を受ける。5言語以外のバックグラウンドをもつ生徒はインドネシア語を受講する。	第二言語の授業なし
学校の歴史	1921年に創立。2002年度に校舎を全面改装。	1918年に2人の教師による学校として創立。	1950年に創立。Kから2年生までのサテライトスクール（分校）として出発。1952年にKから6年までの生徒を受け入れ、現在の姿となる。
生徒数の増減	80年代は70名まで減少したが、アルティモ地区の再開発以降、生徒数は増加している。	学校周辺の人口が増加しており、生徒数が毎年30名増えている。校舎は22教室だが現在28教室必要で、敷地内に12の仮設教室を建てている。	ある時期に90人まで生徒数が減り、現在は167人。

またニュージーランドの原住民であるマウリ族の子どもも多く通っている。そのため、両校では、LOTE（第二言語）のクラスが開設されている。アルティモ小学校では、生徒のバックグラウンドに関わらず、すべての生徒が中国語の授業を受ける。配当時間は、Kで週に30分、1年生から6年生では1時間である。中国系の生徒は、さらに1時間、持ち出しの中国語の授業を受け、特別教室において、高度な中国語の読み書きを習っている。

図表 5 学校規模の分類と学校数

規模分類	基準 (生徒数)	現在の 生徒数	学校数	副校長の数
Class 1	700 以上	601-1200	75	3 名。1 名は専任，2 名は教諭兼務。生徒数が1000人を超えると専任が2名となる。
Class 2	451 から 700	301-800	271	1 名
Class 3	301 から 450	201-600	357	なし
Class 4	160 から 300	36-500	346	なし
Class 5	26 から 159	1-200	449	なし
Class 6	6 から 25 もしくはそれ以下	1-35	134	なし
合計			1649	

(注) NSW 州の「学校と生徒に関する情報と統計」(Statistics Bulletin for 2003)を参照して作成。http://www.det.nsw.edu.au/reports_stats/stats/schools.htm

カールトンは大規模校であるため、中国語、アラビア語、インドネシア語、マウリ語、マサドニア語の5言語の授業が開講されており、生徒は自分のバックグラウンドにあわせて、また、5言語以外のバックグラウンドをもつ生徒はインドネシア語を週に2時間勉強している。一方、ミドーバンク小学校では、比較的、マルチカルチャーなバックグラウンドをもつ生徒の割合が低く、25%程度である。生徒数が167名と少ないこともあり、第二言語の授業は開講していない。

学校の歴史は、アルティモ小学校が1921年に、カールトン小学校は1918年に、ミドーバンク小学校は1950年に創立されている。生徒数の変遷については、アルティモ小学校は80年代に70名まで減少したが、立地するピアメント湾岸の再開発の影響もあり、近年は生徒数が増加している。カールトン小学校は、学校周辺への人口流入が激しく、生徒数は毎年30名ずつ増加している。そのため校舎には22教室しかないが、現在は28教室が必要であり、敷地内に12の仮設教室を建てて、しのいでいる状況である。カールトンも、一時期、90名まで生徒数が減少したが、積極的なPRの成果もあり、現在は167名までに回復した。

なお、学校規模に関して、NSW 州の学校は、学校規模により P1 スクール (primary school class 1) から P6 スクールに分類されている。学校規模分類に応じて、学校管理職の配置の様態が異なる。図表 5 は、規模分類と生徒数の基準、実際の生徒数、現在の学校数、学校管理職の配置数についてまとめたものである。すべての学校には、校長 Principal と学校事務を担当する事務室長 Senior School Assistant が配属されており、また、教諭を兼任するステージ主任 Assistant Principal が各ステージに置かれている。ステージとは、K は初期ステージ early stage 1、1～2 年はステージ 1、3～4 年はステージ 2、5～6 年はステージ 3、ハイスクールはステージ 4 と 5、そして12 年生はステージ 6 と表されるものである。学習指導要領は、ステージごとに内容の一貫性とまとまりのあるものに設定されている。

さらに、学校規模に応じて、副校長 Deputy Principal が配属される。P2 スクールでは、

副校長は1人、P1スクールでは専任の副校長が1人と、教諭を兼任する副校長が2人の計3名、P1スクールでも生徒数が700名を超える場合は、2人の専任の副校長と1人の教諭を兼任する副校長が配属される¹¹⁾。

なお、現在の生徒数と基準が一致しないのは、学校が規模の認定を受けてから、人口動態的变化があったためである。

(2) 教職員の構成

NSW州では、雇用できる担任教師の数を算出する計算式を定めている。Kから2年までは「生徒数 \times 0.385」、3年から6年までは「生徒数 \times 0.333」で算出された数字のうち、小数点を切り上げた人数を、学校は雇用することができる。政府の平均は、K 26人、1年27人、2年29人、3年から6年は30人である。学年ごとの生徒数で計算するわけではないため、アルティモ小学校のように、雇用できる担任教師数と学年ごとのクラス数が一致せず、2学年複合のクラス編成をとって対応するところもある。

教師のリクルートは、教師の欠員が生じた際に、校長が学区本部 central office に連絡をし、学校で働きたい有資格者の登録データバンクに、①担当可能科目 expertise, ②特別な資格 aptitude, (例えば、アボリジニに関する授業が可能、恵まれた才能のある生徒に対する授業が可能、英語が第二言語である生徒に対する授業が可能など)、そして③居住区 living area の3つのコードを入力し、ヒットした教師を配置する仕組みとなっている。登録データバンクの検索において、「科学に興味がある」「子どもの福祉に興味がある」などの条件を付け加えることはもちろん、教師の男女構成比が極端に偏っている場合でも、希望する教師の性別を伝えることはできず、学校は検索でヒットした人物を自動的に雇用しなければならない。適任者がヒットしない場合は、新聞に「教師募集」の広告を出す。誰でも応募できるため、学校は、校長、保護者の代表、教師の代表で構成される人事委員会 selection committee を作って選抜を行う。

カールトン小学校の校長は、校長に人事権がないこと、教師のリクルートにおいて学校側に選択の余地がないことを問題点として指摘している。

小学校に雇用されている教職員スタッフを一覧にまとめたものが図表6である。担任教師のほか、さまざまな専門家が、教師もしくはスタッフとして雇用されている。

「Release to face to face」とは、担任教師が週に2時間、授業準備や採点のために「対面教授から解放」されるという制度である。その時間の生徒の面倒をみる教師が雇用されており、彼らは、多くの場合、体育や図工（クリエイティブアーツ）など、日本でいわゆる「専科」と呼ばれている科目を担当している。「Reading Recovery」とは、落ちこぼれを出さないプログラムのひとつで、1年生を対象とした集中的な読み書き能力の補習プログラムである。特別な研修を受けた教師が、読み書きに問題を抱えていると認定された生徒を対象に、16週から20週にわたり毎日30分ずつ個人指導に携わり、学年の平均能力を上回るように指導している。

小学校はクラス担任制を取っているため、原則としてクラス担任がすべての教科を教えるが、担任教師の他に、LOTE（第二言語）の授業を開講している学校では、第二言語の教師を雇用し、また科学やコンピューター教育のために特別に講師を招いている学校もある。

図表6 教師のスタッフの構成

教職員の種類		アルティモ	カールトン	ミドーバンク
管理職 Administrative Staff	校長 Principal	○1名	○1名	○1名
	副校長 Deputy Principal	○3名	○3名	○3名
	ステージ主任 Assistant Principal	○1名	○1名	○1名
	事務室長 Senior School Assistant			
担任教師 Classroom Teacher		○9名	○29名	○7名
教科担任 Teacher for Special Subject	第二言語 LOTE	○1名 (中国語)	○5名 (中国語・アラブ語・マサドニア語) ●1名 (マウリ語: 週4回)	×
	第二言語としての英語 ESL	○1名 ●1名 (週3日, うち RFF の補助として2回)	○5名 ●4名 (週2回)	●1名 (週1回)
	科学とテクノロジー Science and Technology	×	×	●2名 (コンピューターの教師が週に2回, 科学の教師が週に1回)
	心身の発達と保健体育 PDHPE	×	×	●1名 (スペシャルプログラムのジムナスティック担当の教師が週に1回)
	創造芸術 Creative Arts	×	×	●1名 (週3回, 同じ教師が体育も担当する)
スペシャルニーズのための教師 Teacher for Special Needs	読み書き能力の補習プログラム Reading Recovery	○1名	フルタイムの ESL のうち2人, 2人とも週に2.5日を担当	×
	学習支援 Support Learning Enrich Program	●1名 (週2回)	●1名 (週3日)	×
	学習障害 Learning Difficulty	●1名 (週2回)		●1名 (週1回)
	心身障害 Physical Difficulty	×	×	×
スペシャルニーズのための援助スタッフ Teacher's Aide for Special Needs	心身障害/学習障害 Learning/Physical Difficulty	●1名 (4名の対象者。障害の重さによって雇用形態が異なる。) ●1名 (週3回, 学習障害対象)	●3名 (毎日数時間)	○1人 (Kクラスに週5回) ●1人 (1人のスペシャルニーズの生徒の世話係が週に1日半)
	アボリジニへのリテラシー教育	●1名 (週1回)	×	×
図書館担当者	図書館司書 Librarian	●1名 (週3回)	○1人 ●1人 (週1日)	●1名 (週2回)
	図書館補助スタッフ Library Aide	●1人 (週1.5日)	●1人 (週1日)	●1名 (週1回)
スクールカウンセラー School Counselor		●1人 (週1日)	●1人 (2.5日)	●1名 (週1回)
職 員	事務スタッフ School Assistant	○2名	○3名 ●1人 (2.5日)	○1人 ●1人 (週1回)
	清掃スタッフ Cleaner	○1名	○2名 (1日6時間)	○1名
	保守スタッフ General Assistant	●1名 (週1回)	○1名 (週5回)	●1名 (週1回)

(注) ○は常勤, ●は非常勤を示す。

また、特別な援助が必要な生徒のための教師やスタッフが雇用されている。オーストラリアに来て間もない生徒にサバイバルイングリッシュを教える ESL¹²⁾ (English for Second Language：第二言語としての英語) の教師、学習障害や障害児のための資格をもった教師と教師補助 (teacher aide) スタッフである。

その他、特徴のある教育活動を展開するために、校長の判断により、アルティモ小学校では週に1回、アボリジニの子ども達に、リテラシーを教える専門のスタッフを雇用し、カールトン小学校では年間9時間、全生徒に詩を教える専門指導員を雇用している。いずれの場合も、学校の予算が限られているため、アボリジニ専門教師は1年のうち20週間のみ雇用し、非常勤スタッフも1週間に来校する日数をできるだけおさえるなど、工夫を凝らしている。

これらの教師やスタッフが常勤であるか非常勤であるかという雇用状態を決定するのは、学校の規模、第二言語のニーズの高い大きなエスニック集団が学区にあるかどうか、学習障害や「第二言語としての英語」を学んでいる子どもの該当人数などによる。

この図表には含めていないが、小学校では、チェスクラブ・ドラマクラブ・楽器クラブなどさまざまな課外活動の場を提供しており、教師がこれらの活動を指導する場合もあるものの、多くの場合、専門指導員を外部から雇っている。その場合、クラブに所属している生徒の保護者が、専門指導員に直接、指導料を支払っている。

(3) 生徒数とクラス構成

公立小学校の場合、各学校には drawing area と呼ばれる通学区があり、ほとんどの生徒は通学区にある学校に進学するが、通学区以外の学校に入学の申請を出すこともできる。まず、通学区に居住する子どもは、全員入学する権利をもっている。入学者数に余裕がある場合は、次の順番で優先順位がある。第1に、通学区に居住していないが、きょうだいがその学校へ通学している者、第2に、校長が妥当な理由があると判断した場合、例えば、両親が学校の近くの会社に勤務しており、居住地の近くの小学校に入学したのでは、アフタースクールケアの6時までに子どもを迎えにいくことができない場合などである。学校は校長、事務室長、教職員の代表で入学者決定委員会 Enrolment placement committee を作り、入学者の決定を行う。

アルティモ小学校は、教師の配置人数と学年人数が一致しないことから、複合学年のユニークなクラス編成を行っている。校長へのインタビューによると、「学年複合クラスは

図表7 クラス編成

	K	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合計
アルティモ	1 クラス 23 名	混合クラス 2 クラス 53 名		1 クラス 30 名	1 クラス 26 名	混合クラス 1 クラス 28 名		9 クラス 241 名
	混合クラス 1 クラス 25 名				混合クラス 1 クラス 27 名		1 クラス 29 名	
カールトン	5 クラス 120 名	5 クラス 130 名	4 クラス 126 名	4 クラス 118 名	4 クラス 94 名	4 クラス 104 名	3 クラス 88 名	29 クラス 780 名
ミドーバンク	1 クラス 34 名	1 クラス 22 名	1 クラス 18 名	1 クラス 30 名	1 クラス 23 名	1 クラス 23 名	1 クラス 17 名	7 クラス 167 名

新しい制度なので保護者は不安を感じているが、同じ学年のなかでも学力のばらつきがあるので、教師は指導可能であると考えている。学年複合クラスを作る際には、年齢に重点をおくよりも、学生のレベルやニーズによってクラスを分けている。算数とハンドライティングでは学年ごとに教科書があるので、4年生は4年生用の教科書、5年生は5年生用の教科書を持っているため、クラスのなかで2つのグループができるが、それ以外の学習では一緒にいき、生徒の能力に応じて指導している」と語っている。

5. おわりに

本論文では、①研究会の研究枠組、②研究対象のひとつであるオーストラリア連邦シドニー市の事例を理解するうえで必要となるNSW州の教育制度の概要、③調査を実施した3つの公立小学校の概要、の3点について報告した。なお、我々の共同研究「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究会」では、以下の計画で、我々の研究成果を公表する予定である。オーストラリアの学校建築の建築と改修に関するポリシーについては『椙山女学園大学研究論集』36号（自然科学篇）に、調査を実施した3つの公立小学校の教科の構造については『人間関係学研究』第3号に、3つの公立小学校の教科外の構造、および教育活動と学校建築の相互規定関係の分析に関しては『椙山女学園大学総合クリエイティブセンター紀要「創」』7号に掲載予定であるので、そちらもあわせてご覧いただきたい。

謝辞 オーストラリアにおける調査を進めるにあたり、3つの公立小学校の校長、教職員の方々、また、コーディネーターのロブ・ラベル氏に大変お世話になった。ここで記して感謝の意を表したい。また、本研究会は、2003年度椙山女学園大学学園研究費助成金A（研究代表者：村上心）の受給を受けて2003年のシドニー調査を、また、2004年度椙山女学園大学学園研究費助成金C（研究代表者：村上心）の受給を受けて2004年のシドニー調査を実施することができた。本研究の推進のために必要な資金を与えてくださった本学園に対しても深く謝意を表したい。

注

- 1) 「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究会」のメンバーは、村上心、山田真紀、川野紀江（椙山女学園大学生生活科学部助手）の3名である。教育分野の研究報告については山田真紀が、建築分野の研究報告については、村上心と川野紀江が執筆するとの役割分担をしている。村上心・川野紀江「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究Ⅰ——オーストラリアNSW州の小学校建築について——」『椙山女学園大学研究論集』第36号（自然科学篇）も参照のこと。
- 2) オーストラリア連邦統計局（Australian Bureau of Statistics）発行の「オーストラリア2004年年鑑（Year Book Australia, 2004）」の“Education and training”の“Primary and secondary education”の項参照。<http://www.abs.gov.au/>
- 3) NSW州教育・訓練省発行、「保護者用学校教育への手引き」2001年、3頁。
- 4) NSW州教育訓練省の2003年版年次報告書（NSW Department of Education and Training Annual Report 2003）を参照。http://www.det.nsw.edu.au/reports_stats/annual_reports/index.htm

- 5) 学習委員会の HP 参照。 <http://www.boardofstudies.nsw.edu.au/schoolcertificate/>
- 6) NSW 州の大学入学センターの HP を参照。2001 年の改革により、これまでの TER (Tertiary Entrance Rank) が廃止され、本文で紹介した UAI になった。
<http://www.uac.edu.au/indexhome.html>
- 7) 学習指導要領に定められた各教科と、その内容と目標については、以下の論文に詳しい。山田真紀「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究Ⅲ——教科の内容と構造に注目して——」『人間関係学研究』第 3 号, 2004 年。
- 8) 小学校のなかにはオポチュニティクラスをもつ学校が多数ある。オポチュニティクラスとは学力が高く優秀な 5・6 年生の児童を集めたクラスであり、児童に知的刺激と豊かな教育環境を提供している。オポチュニティクラスに進級するかどうかは、学校での成績とオポチュニティクラス選考テストの結果をもとに判断される。
- 9) 各学校の学校時間は以下の通りとなっている。アルティモ小学校は早めの昼食を取り、アフタヌーンティを取るというスケジュールになっている。

アルティモ小学校	カールトン小学校	ミドーバンク小学校
学校時間：9:00-3:00 ランチ：11:25-12:25 アフタヌーンティ：1:35-2:00	学校時間：9:00-3:00 モーニングティ：11:00-11:20 ランチ：1:00-1:55	学校時間：9:15-3:15 モーニングティ：11:15-11:35 ランチ：12:50-1:45

- 10) 山田真紀, 前掲論文参照。
- 11) 学校管理職の配置については、アルティモ小学校副校長より情報提供を受けた。公文書による裏付けが取れていないため、今後の調査の進展により、内容が変更になる可能性もある。
- 12) ESL には 3 つのレベルがある。レベル 1 はまったく英語を話すことのできない生徒を対象とし、マンツーマンで対応する。レベル 2 はオーストラリア在住暦が 3 年以下の生徒を対象とし、小グループで英語を教える。レベル 3 は、英語を第一言語としないが、3 年から 5 年間オーストラリアに住んでおり、基本的な英語を覚えている生徒を対象とし、英語能力の不足部分を補う。

参考文献

- 石附実・笹森健『オーストラリア・ニュージーランドの教育』東信堂, 2001 年。
- L, フォスター (吉井弘訳)『オーストラリアの教育』草書房, 1991 年。
- 山田真紀「オーストラリアの小学校における特別活動①——オーストラリアの教育制度と教育政策——」『道徳と特別活動』, 文溪堂, 平成 15 年 4 月号, 58-61 頁。
- 山田真紀「オーストラリアの小学校における特別活動②——小学校の日常生活について——」『道徳と特別活動』, 文溪堂, 平成 15 年 5 月号, 46-49 頁。
- 山田真紀「オーストラリアの小学校における特別活動③——シドニーの小学校の教科外活動——」『道徳と特別活動』, 文溪堂, 平成 15 年 6 月号, 46-49 頁。

参考資料

- オーストラリア連邦の「教育・科学・訓練省」HP
<http://www.dest.gov.au/>
- NSW 州の「学習委員会」HP
<http://www.boardofstudies.nsw.edu.au/>

NSW 州の「教育・訓練省」HP

<http://www.det.nsw.edu.au/index.htm>

<http://www.det.nsw.edu.au/languagesupport/language/japanese.htm>（日本語）



写真1 アルティモ小学校（校庭）



写真2 アルティモ小学校（ホール）



写真3 カールトン小学校（校舎）



写真4 カールトン小学校（図書館）



写真5 ミドーバンク小学校（校舎）



写真6 ミドーバンク小学校（教室）